Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

イラン映画『別離』の日本語版と英語版における異文化要素の翻訳ストラテジー : 訳出方略に影響を与える要因と翻訳プロセス

大庭, 夕穂

(Citation)
国際文化学,36:1-25

(Issue Date)
2023-03-20

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100479394

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479394

イラン映画『別離』の日本語版と英語版における異文化要素の翻訳ストラテジー

—訳出方略に影響を与える要因と翻訳プロセス—

A Comparative Analysis of Japanese and English Translations of the Iranian Film *"A Separation"*: Influential Factors on Translation Strategies and Translation Processes

大庭　夕穂
Yuho OBA

Summary

The current paper compares and analyzes English and Japanese versions of the Iranian film "*A Separation*," focusing on strategies for translating stereotyped allusions in the film. First, it defines the range of stereotyped allusions studied in this paper and presents Pedersen's influencing factors in the translator's choice of the strategies (2005) as an aspect of the case study. Next, it examines overall strategies of each version of the film and categorizes the stereotyped allusions based on the overall analysis data for a detailed case analyses. Based on the analyses, it is observed that all versions of the film employ target-oriented translation strategies, and the strategies —both overall and individual— of Japanese versions are highly influenced by English subtitles. The translation processes of Iranian films in Japan are also affected by Western values. Further research is needed to see whether this target-orientation can be seen in English and Japanese translations of other Iranian films, and to examine the influence of English as a pivot language.

キーワード
イラン映画、視聴覚翻訳、異文化要素、重訳

1 はじめに

『別離』（2011）は、アスガー・ファルハディ監督による劇映画である。2012 年、第 84 回アカデミー賞外国語映画賞に輝き、脚本賞にもノミネートされた。イラン映画で初めてアカデミー賞を受賞した先駆的作品といえる。アカデミー賞を受賞したことで、『別離』はイラン国内のみならずヨーロッパやアメリカをはじめ、全世界から脚光を浴びることになった。日本でも注目すべき外国映画として複数のメディアで紹介され（浜田 2012、米光 2012）、全国の映画館で劇場公開された。

映画は異文化に触れる手頃な手段のひとつであるが、映画が国境を超える際、付随する字幕や吹き替えといった視聴覚翻訳が重要な役割を果たす。世界中の多くの国と地域で海外の映像が観られるようになった今日、視聴覚翻訳の需要が急増し、視聴覚翻訳に対する学問的な関心も高まっている。

視聴覚翻訳を研究で取り上げる意義は、大きく 2 つある。1 つ目は、視聴覚翻訳は映像と音声といった非言語情報が伴うため、主に文学作品を研究対象とする従来の翻訳研究の成果が、そのまま字幕や吹き替えに適用できないという点である。例えば、視聴覚翻訳は映像と音響に文字を同期させる（視覚情報と聴覚情報を整合させる）必要があり、時間・空間をはじめとする様々な制約に縛られる。清水（1990）が「映画字幕は翻訳ではない」と述べるように、映像翻訳は通常の翻訳概念では捉えられない部分が多い（Pérez González 2009）。2 つ目は、文化的観点からの必要性である。視聴覚翻訳に限らず、翻訳はオリジナル作品（原作）の言語的意味を伝達するだけでなく、異文化の運び手でもある。特に、映画の翻訳は社会的影響力が大きく、異文化交流の手段として可視的であるため、作品そのものに対する見方だけでなく、背景にある文化の捉え方にも影響を与えるという意味で、他のジャンルの翻訳よりも異文化表象との関係が深い（Ramière 2006）。

視聴覚翻訳についての研究は、翻訳研究の中でも比較的新しく注目され始めた領域である。映像翻訳の技術的な発展と普及に従い、特に 1990 年代以降急増しているが、研究者の関心は媒体上の制約やそこから生じる誤訳といった限られた範囲の問題に偏る傾向にあった（Pérez González 2009）。原作を同じくする複数の字幕版において、どのような訳出方略の違いが見られるかを研究したもの（Pedersen 2011、Leppihalme 2011）や、字幕と吹き替えを媒体上の違いという観点から比較・分析したもの（Díaz Cintas 1999、藤濤 2007）はあるが、それらを組み合わせた研究は十分に行われているとはいえない。

さらに、イラン映画を対象とした翻訳研究の事例はまだ少なく未開拓の分野といえる。日本でイラン映画を観る場合、映画館での上映以外に、テレビ放映や DVD といった形態でも視聴の選択肢がある。いずれにせよ、視聴者は字幕や吹き替えを頼りに作品を観ることになる。日本とイランは言語的にも文化的にも距離があり、この二国間の翻訳を取り巻く問題について議論する際は、言語内の要因だけでなく、言語外の諸要因も考慮する必要がある。制約の多い視聴覚作品の翻訳において、異文化要素、つまり、ある文化には存在するが別の文化には存在しないものをいかに処理するかは、翻訳に関する諸問題の中でも特に重要な課

題である。このように、イラン映画の研究において、文化の差異に起因する翻訳上の問題に対して翻訳者がどのような立場をとるのか、文化固有の事柄や価値観が厳しい制約の中でどう訳され、なぜそのように訳出されるのか要因を探ることは、日本におけるイランの文化表象や異文化理解の観点からも重要だといえる。

英語から別の言語へ翻訳されるケースが多数を占める視聴覚翻訳研究の中で、非英語映画に付けられる英語字幕に着眼した研究は少数ながら存在する。Gottlieb（2009）は、デンマーク語と英語の言語ペアにおいて、デンマーク映画に付けられる英語字幕はその逆より忠実度が低いことを明らかにした。篠原（2014: 98）は、日本映画に付けられた英語字幕の訳出傾向を、「標準化」と「国際化」という概念を用いて説明している。しかし、非英語同士の言語ペアで、英語を介した翻訳についての問題を取り上げた考察はほとんど見られない。St André（2009）によると、重訳とは、翻訳された訳文を別の言語に翻訳することである。重訳は翻訳過程のコスト削減や当該言語間の専門家不在の場合に採用される手段であることから、経済的制約や技術的制約と結び付けられる。国際言語である英語が重訳の中継言語となることも多く、重訳における英語の役割は、国際言語である英語の優位性を示すことにもなる。一方で、国際化する映画産業において、重訳が方略として利用されつつあることは事実である。例えば、海外での受容を視野に入れた非英語映画にとって英語は必須の言語である。篠原（2014）のいうように、グローバル化の影響で英語字幕に対する需要や関心が高まっているのであれば、イラン映画の翻訳においても英語のフィルターがかかるなど、訳出に何らかの影響を及ぼすのではないだろうか。

そこで本稿では、イラン映画の異文化的な要素の翻訳について、英語の影響という観点から研究を行う。イラン映画『別離』のペルシア語から日本語及び英語方向への翻訳を比較・分析することで、訳出方略の決定にどのような要因が影響を与えるのかを明らかにする。日・英字幕の比較に加え、日本語吹き替え版も分析対象に含めることで、イラン映画の翻訳に潜む問題を浮き彫りにすることが目的である。文化的要素の例として「固定化した隠喩」を分析に用いる。今日のグローバル化の中で、イラン映画の翻訳においても英語の影響があるのかを検証し、英語のフィルターという問題を含めて考察を行う。

以下、本稿では翻訳理論の観点からイラン映画研究にアプローチするため、翻訳理論の慣例に従い、原文を起点テクスト（Source Text, ST）、翻訳を目標テクスト（Target Text, TT）と呼ぶ。

II　先行研究

2.1 字幕翻訳と吹き替え翻訳

海外の映像コンテンツが広く流通するようになった今日、受容者[1]にとって視聴覚翻訳は不可欠な存在である。視聴覚翻訳の研究は、言語以外の要素を含むテクストを他の言語文化へ移すケースが扱われるという意味で、他の通常の翻訳と大きく異なる。例えば挿絵を含まない「文字から文字」の文学作品の翻訳は「単一記号」の翻訳であるのに対して、「音声から文字」へと媒体が変わる字幕は「異種記号」の翻訳形態である。視聴覚翻訳の特徴を端的に言えば、マルチモード型及びマルチメディア型の翻訳である。マルチモード型とは、テク

ストの解釈に言語以外の幅広い記号手段を使用するタイプのことで、言語以外の要素には映像、音楽、色彩、視点などがある。マルチメディア型とは、これらの多様なモードが同期されることで、様々なメディアを通して最終的にはスクリーン上で視聴者に伝達されるタイプのことである（Pérez González 2009）。

視聴覚翻訳の中でも主流なのが字幕と吹き替えで、特に映画翻訳でよく用いられる二大形態である。Gottlieb（1997: 311）は、字幕の特徴を 5 つの観点から説明している。(1) 音声言語ではなく書記言語であること、(2) 起点言語の台詞がそのまま保持された状態でオリジナルに追加されていること、(3) 常に遅れをとる同時通訳とは異なり、オリジナルと翻訳が正確に同期して画面に表示されていること、(4) 受け手には制御できない状態で台詞が一瞬のうちに消えていくこと、(5) 字幕翻訳された映像は複合記号的であり、字幕それ自体は、相互に作用し合う複数のコミュニケーションチャネルの一つに過ぎないこと。

字幕と吹き替えの違いとしては、これら 5 つの観点のうち、吹き替えには(1)と(2)が該当しない。吹き替えは音声言語によるコミュニケーションであり、声優などの専門家が、オリジナル音声に代わって目標言語で台詞を吹き替える行為のためである。

これらの特徴ゆえに、字幕は文書翻訳と比べてかなりの制約がある。字幕の制約について Hatim & Mason（1997: 78-79）は次の 4 点に分類している。

(1) 音声から文字へのシフトに伴う制約。その結果、標準的でないアクセントや抑揚といった話し言葉の特徴が反映されにくい。

(2) 表現媒体・チャネルの制約。スクリーン上の 1 行当たりの字数制限、行数制限、および字幕をスクリーンに映し出す時間的な制約などの物理的制限。

(3) (2)の結果、字幕はオリジナルに比べ凝縮された内容になる。一読しただけで理解できるような簡潔さが要求され、かつ前後と結束性のある訳出を行う必要がある。

(4) 映像との整合性。映画では音響と画像は切り離すことができない。翻訳の際は、字幕が映像と整合していることが求められる。

字幕に対して、吹き替えの制約は幾分緩い。音声から音声への翻訳であるため、字幕のような物理的制限に縛られないためである。その分オリジナルに含まれていた情報をより多く伝達でき、内容の省略が少なく済む。さらに、吹き替えでは視聴者の注意が映像と文字に分割されることがない。デメリットとしては、「コストと時間がかかる」ことや、「リップシンクの必要性が翻訳を困難にする」ことが挙げられる（藤濤 2013: 231）。これらの制約は、ST と TT の間の言語的距離によって影響を受ける。また、翻訳される側の社会での字幕と吹き替えの位置付けによっても細かな規定は異なる。字幕と吹き替えに見られるこれらの媒体上特有の制約にも関わらず、映画には受け手に理解できる非言語情報が提供されているため、TT 受容者にとっても解釈が可能となる。つまり、言語要素と非言語要素は相補的に作用し合う関係性にあり、これは「補完」にも「束縛」にもなりうる（藤濤 2016）ということだ。

2.2 視聴覚翻訳における異文化要素

言語は、その社会の歴史や宗教などと深く結びついており、言語と文化を切り離して考えることはできない。そのため、ST に含まれる起点文化特有の要素を目標文化に向けてどう

訳すかという問題は、視聴覚翻訳、文芸翻訳を問わず、多くの研究者の間で関心の的となっている（Gottlieb 1997、Pedersen 2005, 2011、篠原 2013、Ramière 2006）。異文化要素は、特定の文化に属する表面的には見えない慣習や内面的な価値観を映し出すこともあり、ただでさえ翻訳するのが難しい。視聴覚翻訳において、視聴者が一度観ただけで理解できるような簡潔さと、異文化の有標性のバランスを取ることは、字幕翻訳者が避けて通ることのできない問題であり、であるからこそ、本稿ではイラン映画の異文化的要素に着目して分析を行う。したがって、ここで異文化要素の概念を明確にしておくことが重要である。

Pedersen（2011: 43）は、ある文化に固有の言葉を「言語外文化的指示（Extralinguistic Cultural Reference, ECR）」とし、ECR を「言語外の存在物や過程に関連する、あらゆる文化的言語表現による言及」と定義している。

篠原（2013）は、Pedersen（2011）によるこの ECR の定義と指示領域[2]をもとに、日本映画『おくりびと』の英語字幕を分析し、訳出志向について検証した。イラン映画の異文化要素（篠原の言葉を借りれば、「イラン的有標性」）の訳出処理について、日本語字幕と英語字幕を比較するために、本稿は Pedersen（2011）の ECR の観点と、それを日本映画の英語字幕分析に応用した篠原（2013）の研究方法を参考にする。

篠原（2013）が用いた ECR の訳出方略には、省略、置換、一般化、直接訳、詳述、保持の 6 通り[3]があり、起点志向と目標志向の 2 項に大きく分類できる。「保持」、「詳述」、「直接訳」は起点志向の方略、「一般化」、「置換」、「省略」は目標志向の方略とされる。起点志向の翻訳ほど異化的であり、受容者を ST に近づける異質化翻訳と言える。受容者にとって負担が大きく、受容者に翻訳であることを意識させる。一方、目標志向の翻訳ほど同化的であり、逆に ST を受容者に近づける受容化翻訳と言える。受容者にとって負担が少なく、自然な翻訳と受け入れられる。字幕は通常、目標志向の訳出方略が採られる傾向にある。しかし、同じ作品の字幕に複数言語の TT が存在すれば、TT によって同化的訳出の程度や方略は異なるはずである。

次節では、イラン映画『別離』の英語版と日本語版について、異文化要素の中でも「固定化した引喩」の訳出志向について検証を行う。さらに、翻訳者による訳出方略の決定にどのような要素が影響するのかを検討する。

III　テクストの分析

3.1 分析の方法と対象作品

3.1.1 分析の方法

Kenevisi, Sharifabad, Bojnourdi（2013）は、イラン映画『別離』の中の「固定化した引喩（Stereotyped Allusions）」に着目し、3 つの英語字幕（公式字幕と 2 つのファンサブ）における訳出方略の違いを比較・調査した。イラン映画に翻訳の観点からアプローチした文献は僅少だが、これはそのひとつである。一方、ST から抽出した「固定化した引喩」の対象が明確ではなく、また字幕の種類によって異なる訳出方略が選ばれる背景にある問題に対しては、十分な説明や要因分析が行われていない。

そこで、本稿は Kenevisi et al.（2013）の研究を発展させて、『別離』の日本語版と英語

版の比較分析を行い、翻訳方略を決定付ける要因分析をも含んだ研究を展開する。Kenevisi et al.（2013）の研究方針に則り、分析箇所は、『別離』の ST から「固定化した引喩」のうち、イスラーム教における神聖な対象である「神」「コーラン」「預言者」「イマーム・ホセイン」「イマーム・ザマーン」「アリー」「アボルファズル」に対する誓いに絞る[4]。具体的には、“…به”「/be…/ : 〜に対して（英語の to…にあたる。“…”には誓う対象の名前が入る。）」を ST から全て抽出し、日本語版と英語版の TT でそれぞれどのように訳出されているか検証する。

Leppihalme（1997: 37）は、「固定化した引喩（Stereotyped Allusions）」を「創造的引喩（Creative Allusions）」とは区別して次のように定義している。「固定化した引喩」とは「元の文脈との接点を完全に失い、語彙化したもの」である（Leppihalme 1997, 50）。「頻繁に使われることで新鮮味が失われ、引喩としての効力がなくなり、お決まりの表現、すなわち慣用句となったもの」と Kenevisi et al.（2013: 234）は言い換える。しかし、それでも「固定化した引喩」は異文化要素の一種であり、単に使われている語句が持つ以上の意味を伝達する。話し手の社会的背景を反映し、その背景を共有する集団の間では特定の「固定化した引喩」の決まった言い回しに対して、決まった解釈がなされる。この定義を基にすると、イスラーム教の神聖な対象に対する誓いは、歴史や伝説、伝承上の人物や出来事に関連しており、「固定化した引喩」と見なすことができる。『別離』では、登場人物の信仰心の深さが鍵となってストーリーが展開する場面がある。例えば、登場人物の一人、ラジエーが、仕事先で金を盗んだ疑いをかけられた時、「イマーム・ホセインに誓って」と引喩を用いて身の潔白を主張する場面がある。イマーム・ホセインとは、主にイランで信仰されているイスラーム教シーア派の十二イマーム派における第 3 代宗教指導者である。この引喩を用いることで、ラジエーという人物の当該場面における感情だけでなく、イスラーム教の特定の宗派に属しているという社会的背景が明らかになる。このように、宗教上の神聖な対象への誓いは「話し手の正直さや誠実さを強調するために頻繁に用いられる」（Kenevisi et al. 2013: 234）ため、それがどのように訳されるかを調べることで、『別離』の字幕翻訳の一定の特徴が明らかにできると考える。

『別離』に出てくる「固定化した引喩」の翻訳方略の分類する上で、本稿は篠原（2013）の分析方法に倣い、そのうち「省略」、「置換」、「一般化」、「直接訳」の 4 つを用いる。篠原（2013）は異文化要素の多岐にわたる分野を調べたが、本稿では「固定化された引喩」に絞っているため、以下のように調整する。

① 省略：　誓いの言葉を完全に省略する。
② 置換：　ST の به قرآن「be Qor’ān　（コーランへの誓い）」を、“I swear”と訳す。
③ 一般化：　ST の　به امام حسین「be Imām-e Hossein　（イマーム・ホセインへの誓い）」を、“I’m swearing on our martyrs”と訳す。
④ 直接訳：　ST の به امام حسین「be Imām-e Hossein　（イマーム・ホセインへの誓い）」を、“I’m swearing on Imam Hussain”と訳す。ST の به خدا「be khoda（神への誓い）」を “I swear to God”と訳す。

尚、「詳述」と「保持」について Pedersen（2011, 77-78）は、起点言語が英語である字幕翻訳を前提として、「起点言語を維持したまま ST の異文化要素が保持または詳述されること」としている。英語以外の言語が起点言語の場合、この 2 つの方略が視聴者にどの程度許容されるかは ST と TT の言語ペアによって異なるであろう。文字体系が同じ言語間の翻訳、例えばヨーロッパ言語間の翻訳やアラビア語とペルシア語間の字幕翻訳では許容範囲内かもしれない。ではペルシア語を起点言語とする英語あるいは日本語への字幕翻訳ではどうだろうか。ペルシア語に馴染みのない視聴者にとって過度の認知的負荷がかかると考えられるため、訳出方略に「詳述」や「保持」が採用されることは可能性として極めて低い。実際、今回分析した『別離』における「固定化した引喩」の英語版と日本語版の訳出方略には、「詳述」と「保持」は採用されていなかった。したがって、この 2 つの方略を次節の分析結果の表には含めない。

3.1.2 分析対象作品と作品概要

『別離』のペルシア語原題は جدایی نادر از سیمین であり、Nader and Simin, A Separation という英題が付された[5]。分析には、英語版と日本語版の DVD[6]を使用する。

この作品は、秘密や嘘の積み重ねによって翻弄される 2 組の家族の人生と複雑な人間模様を描いている。分析に入る前に、背景知識として同作品の概要を記す。

テヘランで暮らす中流階級のナデルとシミンは、11 歳の娘の教育を巡って反発し合い、離婚の危機を迎えている。娘の将来を憂慮し外国に移住したい妻に対し、夫のナデルはアルツハイマーの父親を心配し、国内に留まることを望む。別居を決意した妻が家を出るのと入れかわりで、ナデルはラジエーという女性を家政婦として雇う。

ある日、ナデルが帰宅すると、ラジエーの姿が見当たらない。ベッドには高齢の父親が縛られ怪我を負い、部屋からは金がなくなっていた。戻って来たラジエーは、金は自分が盗んだのではないと執拗に食い下がる。ナデルはラジエーを突き飛ばして家から追い払うが、その晩ラジエーは流産し、夫とともに、ナデルを告訴する。妊娠 4 ヶ月以降の胎児は 1 人の人間として扱われるため、有罪となればナデルは殺人罪に問われてしまう。焦ったナデルは、ラジエーの妊娠を知らなかったと嘘をつく。

後日、ナデルの娘の先生が、裁判所に証言のために召喚される。先生がナダルに有利な発言をしたことで、ラジエーの夫は学校へ押しかけ先生を侮辱する。先生は挑発に応える形で、ナデルがラジエーの妊娠を知らなかったとコーランに誓いを立てる。しかし嘘がばれ、ナダルは先生から冷たい態度をとられる。

やがて示談が進み、ナデルは慰謝料を払うためにラジエーの家を訪れる。ラジエーの家族は貧しく、慰謝料を借金返済の当てにしている。皆が集まる中、今度はナデルが、自分が原因で流産したとコーランに誓うようラジエーに求める。敬虔深いラジエーは、確信がないため誓うことができない。実は、事件前日に車に撥ねられたことを隠していたのだ。解決の糸口が見つからないまま、ナデルとシミンは離婚を決め、娘はどちらの側についていくか決断を迫られるのだった。

3.2 分析の結果

ST における「固定化された引喩」、つまり「神」、「コーラン」、イスラーム教の聖人に対する誓いを抽出した結果が表 1 である。表の数字は、それぞれの「固定化された引喩」が ST で抽出された個数と、その合計を示す。表 2 の左から順に、「神に誓って」が 13 回、「コーランに誓って」が 5 回、「イマーム・ホセインに誓って」が 2 回、「イマーム・ザマーンに誓って」が 2 回、「預言者に誓って」が 2 回、「アリーに誓って」が 1 回、「アボルファズルに誓って」が 1 回となっている。ST において、「固定化した引喩」は全部で 26 箇所あった。

表 1 ST から抽出された「固定化された引喩」の数

	به خدا	به قرآن	به امام حسین	به امام زمان	به پیغمبر	به علی	به ابوالفضل	合計
数	13	5	2	2	2	1	1	26

ST から抽出した 26 個全ての「固定化された引喩」について、英語字幕・日本語字幕・日本語吹き替えにおける訳出方略をまとめた結果が表 2 である。それらについて、各 TT でどの訳出方略が採用されているかを同定した結果が表 3 である。表 2 からはテクスト全体にわたる翻訳ストラテジーがわかり、表 3 からは「固定化された引喩」の種類別の訳出傾向がわかる。

尚、表と具体例分析では英語字幕を TT-E（Target Text-English）、日本語字幕を TT-J1（Target Text-Japanese 1）、日本語吹き替えを TT-J2（Target Text-Japanese 2）と記すこととする。

表 2 全「固定化された引喩」の英語字幕・日本語字幕・日本語吹替における訳出方略

	異文化要素（ECR）転移方略			
	目標志向			起点志向
	省略	置換	一般化	直接訳
TT-E	15	6	3	2
TT-J1	19	3	1	3
TT-J2	15	6	2	3

まずは表 2 から各 TT のテクスト全体にわたる翻訳ストラテジーを明らかにする。英語字幕で採られた方略は、省略 15 回、置換 6 回、一般化 3 回、直接訳 2 回となっており、目標志向の方略は 24 回、起点志向は 2 回のみである。日本語字幕では省略 19 回、置換 3 回、一般化 1 回、直接訳 3 回となっており、目標志向の方略は 23 回、起点志向は 3 回のみである。日本語吹き替えでは省略 15 回、置換 6 回、一般化 2 回、直接訳 3 回となっており、目標志向の方略は 23 回、起点志向は 3 回のみである。個別方略の採用回数に多少のばらつきはあるものの、省略が最も多く採用され、目標志向の方略が起点志向の方略を数で圧倒しているという点で、3 つの TT の訳出志向に差はほとんど見られない。英語版も日本語版もテ

クスト全体にわたる翻訳ストラテジーは、目標志向であると言える。

表 3 各「固定化された引喩」の英語字幕・日本語字幕・日本語吹替における訳出方略

		異文化要素（ECR）転移方略			
		目標志向			起点志向
		省略	置換	一般化	直接訳
به خدا : 13 （神に誓って）	TT-E	10	2		1
	TT-J1	11	1		1
	TT-J2	12			1
به قرآن : 5 （コーランに誓って）	TT-E	2	2		1
	TT-J1	3			2
	TT-J2	1	2		2
به امام حسین : 2 （イマーム・ホセインに誓って）	TT-E		1	1	
	TT-J1	1		1	
	TT-J2			2	
به امام زمان : 2 （イマーム・ザマーンに誓って）	TT-E			2	
	TT-J1	1	1		
	TT-J2		2		
به پیغمبر : 2 （預言者に誓って）	TT-E	1	1		
	TT-J1	1	1		
	TT-J2		2		
به علی : 1 （アリーに誓って）	TT-E	1			
	TT-J1	1			
	TT-J2	1			
به ابوالفضل : 1 （アボルファズルに誓って）	TT-E	1			
	TT-J1	1			
	TT-J2	1			

次に表 3 から「固定化された引喩」の種類ごとの訳出傾向を明らかにする。訳出方略の分布から、アリーとアボルファズルに対する誓いは 1 箇所ずつしかないが、いずれも省略の方略が採られている。イマーム・ホセイン、イマーム・ザマーン、預言者への誓いは 2 箇所ずつしかないが、それぞれ全ての TT で、省略以外の目標志向の方略（置換と一般化）が採用されている。これら 3 種類の「固定化された引喩」は、前述のアリーとアボルファズルと同じように TT 受容者に馴染みのないイラン的異文化要素である。それにも関わらず省略以外の方略が選択されていることに着目し、それぞれを区別して扱うこととする。さらに、神とコーランに対する誓いはそれぞれ 13 回と 5 回あるが、他の「固定化された引喩」にはな

い起点志向の訳出方略（直接訳）が採択されている。神とコーランは TT 受容者にもいくらか馴染みがあるイラン的要素であり、かつ起点志向の異化的な翻訳手法が採られているという点において他の 5 つとは区別される。したがって、『別離』における「固定化した引喩」は、その訳出方略の傾向によって 3 つのカテゴリーに分けられる。第 1 のカテゴリーは神とコーランの 2 つで、起点志向の方略を含む。第 2 のカテゴリーはイマーム・ホセイン、イマーム・ザマーン、預言者の 3 つで、目標志向の方略のうち省略以外の方略を含む。第 3 のカテゴリーはアリーとアボルファズルの 2 つで、採られた方略が省略のみである。

この分析結果を踏まえて、次項では上述のカテゴリーごとに、英語字幕・日本語字幕・日本語吹き替えの 3 つの TT における訳出方略の適応状況を個別に観察し、訳出志向について検証する。テクスト全体を通して目標志向の訳出方略が多く採られたことで同化のプロセスを辿った結果、ST と 3 つの TT の間に差が出たことは明らかである。では、TT 間ではどうだろうか。同化的訳出志向の傾向が共通しているとは言え、同じ箇所で全く同じ方略が採られるとは限らない。今度は 3 つの TT 間で差が出た箇所、あるいは出なかった箇所について、複数の具体例を取り上げながら、その要因を調査する。

3.3 具体例分析

本項では、前項で明らかになったテクスト全体の翻訳ストラテジーに対して、個別の方略の適応状況を 3 つのカテゴリーに分けて観察する。さらに、個別の事例でなぜその方略が採られたかについての背景要因を探ることが重要である。Kenevisi et al.（2013）は、要因分析の方法として、Pedersen（2005）の分析観点を利用することを提案している。Pedersen（2005）は、字幕翻訳者の ECR 訳出方略の選択に影響を与える 7 つの要素として、(1)「超文化性」、(2)「外テクスト性」、(3)「言及の中心性」、(4)「記号間の冗長性」、(5)「テクスト内の前後関係」、(6)「メディア特有の制約」、(7)「パラテクスト」を挙げている[7]。これらの観点を具体例分析に活用する。

<u>カテゴリー①「神への誓い」「コーランへの誓い」</u>

『別離』において、神とコーランへの言及は ST 全体を通して何度も出てくるが、そのうち「神への誓い」だけでも 13 個所にのぼる。神とコーランという言葉を含む引喩はペルシア語話者にとってまさに「固定化された引喩」と言ってよいだろう。それゆえ、ストーリー上あまり重要でないシーンでは、ST 受容者にとって「お決まりの表現」程度の言葉と捉えられるため、TT で「省略」の方略が採られている。【例 1】と【例 2】がその典型である。

【例 1】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：低

ST	日本語訳[8]
راهم دوره <u>به خدا</u>	私の道のりは遠い、<u>神に誓って</u>

TT-E:　It’s a long commute.　省略

TT-J1:　道のりが遠くて　省略

TT-J2:　うちからここまで遠いんです　省略

【例 2】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：低

ST	日本語訳
خانوم، به خدا باید ببخشید شما را هم تو زحمت انداختیم	先生、神に誓ってあなたにも面倒をかけてすみません

TT-E:　Forgive us for taking your time.　省略
TT-J1:　お手間を取らせて…　省略
TT-J2:　先生、お手間を取らせてすみませんでした　省略

【例 1】と【例 2】は別々の場面からの台詞であるが、どちらも登場人物がその日初めて会う別の人物に挨拶をする場面である。挨拶の前後に、言い訳や労いの言葉を添えているのだが、それを強める意図で به خدا（神に誓って）が使われている。局所的台詞においてすら重要ではないため、言及の中心性は低い。イスラーム教の神という概念は超文化的ではあるが、言及の中心性が非常に低いために 3 つの TT 全てにおいて「省略」が採られた。【例 1】と【例 2】に類するものが、他に 4 箇所見られた。

【例 3】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：低

ST	日本語訳
نه، امروز به خدا من مجبور شدم این کار رو کردم	いいえ、今日、神に誓って、私はこの仕事をしなければならなかった

TT-E:　No. I swear to God, today I had to.　直接訳
TT-J1:　今日は事情が　省略
TT-J2:　いいえ、今日だけ特別な事情が　省略

【例 3】は、ナデルに父親を拘束して外出したことを咎められたラジエーが言い訳をするシーンである。後ろめたさと申し訳なさを感じながらも、常習的に外出していたわけではないと弁明するために、به خدا が使われている。物語の重要なシーンへの導入部であるが、言及の中心性はやや低いため、英語では直接訳が、日本語版では省略が採用され、日・英間で差が出ている。

神への誓いの訳出に関して日・英間で最も差が出たのは物語終盤（【例 4】～【例 7】）である。ナデルはラジエーに、自身のせいで流産したとコーランに誓うよう要求するが、誓えないラジエーは夫に真実を話す。流産の前日に車に轢かれたという真相を、ラジエーは夫より先に義姉アザムには話していた。

【例 4】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：低

ST	日本語訳
به خدا من به اعظم گفتم	神に誓って、私はアザムに言った

TT-E:　I swear I told Azam.　置換

TT-J1:　義姉さんに打ち明けた　省略
TT-J2:　お義姉さんには話したわ　省略

【例 5】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：高

ST	日本語訳
من می ترسم، می ترسم	私は怖い、怖い
به خدا بدبخت میشیم	神に誓って、私たちは惨めになるだろう

TT-E:　I am scared we'll be punished.　省略
TT-J1:　怖いわ　きっと天罰が下る　省略
TT-J2:　そんなことしたら大変　きっと天罰が下る　省略

【例 6】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：高

ST	日本語訳
به خدا من نمی تونم …	神に誓って、私はできない

TT-E:　I can't.　省略
TT-J1:　イヤよ　行きたくない　省略
TT-J2:　イヤよ　私行きたくない　省略

【例 7】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：高

ST	日本語訳
به خدا…	神に誓って

TT-E:　省略
TT-J1:　神様…　直接訳
TT-J2:　神様　直接訳

【例 4】は、これから大事なことを告白するという段階で、「実は」先に義姉には打ち明けていた、という程度のニュアンスである。言及の中心性はやや低いため、【例 3】と同様の理由で日・英間の訳出方略の判断に差が出たものと思われる。また、【例 4】では終盤で初めて、しかも一度しか出てこない登場人物の名前（アザム）に対しても、英語版と日本語版で異なるアプローチがなされた。英語版は直接訳を採用したのに対して、日本語版では省略の方略が採用された。【例 5】【例 6】では、信仰心の深いラジエーが、確信がないままコーランに誓えば罪になることを恐れ、恐怖を抱いている。日本語版では字幕と吹き替えそれぞれに「きっと天罰が下る」と「イヤよ」という言葉が補われている。「神」と「誓う」のどちらの要素も含まれておらず、分類上は省略としたが、英語字幕の省略とは質的に同じとは言えない。【例 7】は、真相が明るみに出て窮地に陥ったラジエーが最後に声を振り絞って به خدا と呟く、鬼気迫るシーンである。登場人物の最後の一言は、その人物が何者であったかを視聴者に印象付けるという意味で重要である。言及の中心性は高いと言える。日本語版では字幕・吹き替えの両方とも「神様」と訳がなされ、英語字幕では省略されている。英語版では、正式な台詞として見なされていない可能性もある。【例 4】から【例 7】までの一

連の流れは、信仰心がラジエーの行動原理となっていることを決定付ける場面であり、日本語 TT の受容者は翻訳を通してそれを理解する機会が与えられている。13 箇所の神への誓いのうち、直接訳の方略は 3 つの TT でそれぞれ 1 回ずつ採用されているが、その適用箇所は英語版と日本語版とで異なり、言及の中心性という観点から、日本語版の方略の方が ST 受容者の感覚をより効果的に受容者に伝えているのではないかと考える。

「神への誓い」の次に多く抽出されたのが「コーランへの誓い」である。「コーラン」が出てくる箇所は 2 つの場面に絞られる。1 つ目は、裁判官に無礼を働き逮捕されそうになる夫をラジエーが必死で庇う場面である。ラジエー自身もナデルの父親を縛って怪我をさせたことで告訴されている上、夫まで逮捕されそうになるという状況下で、涙目で裁判官に懇願する。理論的でなく、むしろ感情に訴えかけるために به قرآن （コーランに誓って）を使用している。物語の局所的台詞（ミクロレベル）においては確かに重要な部分だが、言及の中心とまでは言えない。また、前後の文脈との重複も見られる。【例 8】と【例 9】は連続するシーンであり、立て続けに به قرآن と به خدا が使われ、「固定化された引喩」が定義通りの使われ方をしている。このような例が他にも見られた。

【例 8】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：低　(5) テクスト内の前後関係

ST	日本語訳
به قرآن تو این یه ماهه یه روز در میون هر شب زندان بوده	コーランに誓って、彼はこの一か月連日連夜刑務所にいた

TT-E:	I swear, he's been in and out of prison the past month.	置換
TT-J1:	夫は先月　金貸しに訴えられ 何度も監獄へ	省略
TT-J2:	あの人この一か月、刑務所を出たり入ったりしているんです	省略

【例 9】　(1) 超文化性：超文化的　(3) 言及の中心性：低　(5) テクスト内の前後関係

ST	日本語訳
حاج آقا به قرآن روزی یه مُشت از اینها می خورم، به خدا دروغ نمیگم	裁判官、コーランに誓って彼は毎日これらから一掴みの薬を飲む、神に誓って私は嘘を言わない

TT-E:	Sir, every day he has to take these. I swear I'm not lying.	省略 （置換）[9]
TT-J1:	毎日薬を飲んでいます 誓って本当です	省略 （置換）
TT-J2:	判事さん、毎日薬を飲まないといけないんです 本当なんです	省略 （省略）

【例 10】【例 11】は、コーランに関する 2 つ目の場面である。妻に不利な証言をしたナデルの娘の先生のもとに夫ホッジャトが押しかけるシーンである。先生はホッジャトの挑

発に乗り、コーランに誓ってナデルがラジエーの妊娠を知らなかったと宣言する。この場面でコーランへの誓いは引喩ではなく、言葉通りコーランに手を置いて誓うことを示す。言動の一致が必要であるが、TT 受容者にとってコーラン自体は認知できる要素だとしても、その上に手を置いて宣誓するという儀礼にまで馴染みがあるとは限らない。映像には 4 つある意味チャネルのうち、コーランらしき本に手をあてる様子（画像＝非言語視覚情報）と宣誓という行為（音声＝言語聴覚情報）、そして字幕（言語視覚情報）と 3 つの記号が重複している。この後、ナデルに不信感を抱いた先生は、証言を取り下げる。人間は誰しも嘘をつき心の中で葛藤を抱える存在であるという、作品の大きなテーマに結び付くシーンである。言及の中心性は高く、全て直接訳が採用されている。単一文化的であること、言及の中心性が高いこと、記号間の冗長性が大きいこと、という 3 つの要素から同時に影響を受けると、通常翻訳者は、訳出方略を決定するにあたって迷いが生じ、TT 間で差が出るものと思われる。3 つの TT 間で共通の直接訳が採用されたことは、偶然ではないだろう。英語 TT から日本語版 TT に影響があったと考えるのが妥当である。

【例 10】(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：高　(4) 記号間の冗長性：高

ST	日本語訳
بابا به همین قرآن، به والله ما هم آدمیم مثل شماها	このコーランに誓って、私達もあなた達のように人間だ

TT-E:　I swear on this Quran,　直接訳
We're humans just like you.
TT-J1:　コーランに誓って　真人間だ　直接訳
TT-J2:　このコーランに誓って　俺は真人間だ　直接訳

【例 11】(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：高　(4) 記号間の冗長性：高

ST	日本語訳
به همین قرآن اون روز که خونه ی اینا بودم شوهر این خانوم نفهمید حرفهای ما رو نشنید حرف های من و زن شما را نفهمید تو آشپز خونه بود	このコーランに誓って、あの日私は彼らの家にいた。この女性の夫は、私たちの話を聞いていなかった。彼は台所にいて、私とあなたの妻の話を理解しなかった。

TT-E:　I swear on this Quran that day at their house,　直接訳
Her husband was in the kitchen
And didn't hear what your wife and I said.
TT-J1:　コーランに誓って　直接訳
彼は　あの日―
台所に居て
私達の話を聞いてない
TT-J2:　このコーランに誓います　あの日彼女のご主人は台所に居て　直接訳
あなたの奥さんと私との会話を聞いていなかった
確かに誓うわ　（追加）

カテゴリー②「イマーム・ホセインへの誓い」「イマーム・ザマーンへの誓い」「預言者への誓い」

「イマーム・ホセインへの誓い」「イマーム・ザマーンへの誓い」「預言者への誓い」は、物語が重要な展開を見せる場面で使用される。それぞれ 2 回ずつ間髪を入れず使用されるため、テクスト内の前後関係とメディア特有の制約という 2 つの要素によって影響を受ける。つまり、字幕翻訳においては同じ「固定化された引喩」が連続で使用される場合、2 箇所のうち少なくとも一方では省略や置換といった方略が採られると予測できる。

【例 12】から【例 16】は、ラジエーが仕事先で金を盗んだと疑いをかけられた時、به امام حسین（イマーム・ホセインに誓って）などの引喩を用いて身の潔白を主張する、一続きのシーンである。【例 12】【例 13】で、日本語吹き替え版は 2 回とも一般化の方略を採っている。日本語字幕では省略と一般化が採られ、英語字幕では置換と一般化が採用されている。字幕作成に、テクスト内の前後関係とメディア特有の制約が影響を及ぼした例と言える。【例 14】【例 15】は、【例 12】【例 13】よりやや長い尺であり、したがって【例 12】【例 13】よりわずかながら字幕の物理的制約が緩んでいる。英語字幕では、2 回とも一般化が採用され、日本語版では置換と省略の方略が採られている。

【例 12】　(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：高　(5) テクスト内の前後関係　(7) メディア特有の制約

ST	日本語訳
به امام حسین اگه من رفته باشم از توی کشوی شما پول برداشته باشم	イマーム・ホセインに誓って、もし私があなたの引き出しの中からお金を持ち出して去ったなら

TT-E:　- I swear I didn't take any money.　置換
TT-J1:　- 盗んでないわ　省略
TT-J2:　- 冗談じゃありません
　私は殉教者に誓って　お金を盗んだりしてません　一般化

【例 13】　(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：高

ST	日本語訳
آقا، من به امام حسین دارم قسم می خورم	旦那様、私はイマーム・ホセインに誓って宣誓します

TT-E:　- Sir, I'm swearing on our martyrs.　一般化
TT-J1:　- 殉教者に誓って　本当です　一般化
TT-J2:　- 旦那様　殉教者に誓ってもお金を盗んでいません　一般化

【例 14】　(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：高　(5) テクスト内の前後関係

ST	日本語訳

من میگم به امام زمان من از اینجا	私は言う、イマーム・ザマーンに誓って、私はここから

TT-E:　I am swearing on our martyrs　一般化
that I didn't go there.
TT-J1:　あの部屋には入ってない　省略
TT-J2:　誓って私あの部屋には入っていませんから　置換

【例 15】(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：高　(5) テクスト内の前後関係

ST	日本語訳
من دارم میگم به امام زمان من اگر از این درگاهی یک قدم پامو گذاشته باشم اونبر	私はイマーム・ザマーンに誓って言っている もし私がこの扉に足を踏み入れたとすれば

TT-E:　I'm swearing on our martyrs　一般化
that I didn't step into that room.
TT-J1:　誓って　あの部屋には　置換
入ってない
TT-J2:　私誓ってもいいんです　あの部屋には絶対入っていません　置換
ほら　私があの部屋に入ったという証拠があるんですか

ここで、【例 12】から【例 15】で採用されている「一般化」の方略について、ひとつの疑問が沸き起こる。「なぜ一般化なのか」ではなく、「なぜ殉教者なのか」である。一般化を採用するにしてもなぜ「殉教者」という言葉が日本語字幕と吹き替えの両方で採用されたのだろうか。この問題は、Pedersen（2005）の 7 つの要素の観点から説明することはできない。これらの例からは、日本語版の翻訳は明らかに英語字幕の martyrs に引っ張られており、英語字幕の影響が見て取れる。

【例 16】　(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：高　(5) テクスト内の前後関係　(7) メディア特有の制約

ST	日本語訳
به پیغمبر اگر من دزدی کرده باشم، به پیغمبر....	預言者に誓って、もし私が嘘をついていたら預言者に誓って

TT-E:　I swear I didn't steal.　置換　省略
TT-J1:　誓って　お金は盗んでない　置換　省略
TT-J2:　本当に私はお金なんか盗んでないんです　神に誓って私は　置換　置換

【例 16】では、3 つの TT で置換と省略が採られている。日本語吹き替えでは、2 回目の به پیغمبر（預言者に誓って）を「神に誓って」と訳している。置換の方略を採ることで、日本の TT 文化において馴染みの薄い預言者という概念を、まだ比較的許容されうる神としている。ST を TT 受容者へ近づける、同化的翻訳の例と言える。

カテゴリー③「アリーへの誓い」「アボルファズルへの誓い」

「アリー」と「アボルファズル」は、TT 社会で認知度が低く、字数制限の観点からも特に字幕には反映されにくいイラン的異文化要素である。翻訳者は、TT 受容者にとって理解の妨げになると考えて「省略」や「置換」の方略が採られた。

【例 17】　(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：低

ST	日本語訳
اینا حرفاشونو یکی کردن به ابوالفضل	彼らは彼らの話を統一した、アボルファズルに誓って

TT-E:　They've fixed their story.　省略

TT-J1:　口裏を合わせてる　省略

TT-J2:　口裏を合わせてるに決まってる　省略

【例 18】　(1) 超文化性：単一文化的　(3) 言及の中心性：低

ST	日本語訳
بابا به من رحم کن -	私に同情してくれ
به اون بچه داری ظلم می کنی، به علی -	君はあの子を虐げているんだ、アリーに誓って

TT-E:　Have mercy on me. On our child.　省略

TT-J1:　- 俺を哀れんでくれ
　娘のことも　省略

TT-J2:　- どうか俺のこと哀れんでくれ
　それと俺たちの娘も　省略

Ⅳ　考察

以上の分析結果をもとに、『別離』における「固定化された引喩」の翻訳方略について考察する。26 箇所の「固定化された引喩」のうち、英語字幕では、目標志向の方略は 24 回（省略 15 回、置換 6 回、一般化 3 回）、起点志向は 2 回（直接訳 2 回）のみである。日本語字幕では、目標志向の方略は 23 回（省略 19 回、置換 3 回、一般化 1 回）、起点志向は 3 回（直接訳 3 回）のみである。日本語吹き替えでは、目標志向の方略は 23 回（省略 15 回、置換 6 回、一般化 2 回）、起点志向は 3 回（直接訳 3 回）のみである。3 つの TT 全てで、目標志向の方略の採用回数が起点志向の方略の採用回数を上回るという結果が得られた。各方略の採用についても、省略が最も多く、次に置換、一般化と続き、直接訳が採用された回数は最も少ないという点が共通している。これらの結果から、英語版も日本語版もテクスト全体にわたる翻訳ストラテジーは似た傾向を示し、各方略の分布についてもほとんど差が見られないことが明らかになった。

次に、「固定化された引喩」の種類ごとに訳出方略の適応状況を見ると、3 つの TT 間で差が出た箇所と出なかった箇所が観察された。差が出た箇所としては、【例 3】や【例 7】が

挙げられる。同じ「神への誓い」でも、直接訳が適用される箇所は英語版と日本語版とで違いが見られた。【例 5】では、英語版と日本語版で方略の分類上の差は出ていない。しかし、日本語版の「天罰が下る」という表現の選択は、敬虔なラジエーという人物の抱く感覚を日本の文化に当てはめて受容者に伝えようとする翻訳者の工夫といえるのではないか。また、【例 4】のように、登場人物の名前に対して英語版と日本語版で異なるアプローチがなされた事例が見つかった。人物の名前を含む固有名詞は異文化要素の一つと捉えられるが、その名前が TT 社会で一般的でない時、あるいは文脈上あまり重要でない時、TT の受容者にとって認知的負荷を与えうる。以上の例からは、日本語版において英語字幕とは異なる独自の訳出手法が確認された。

3 つの TT 間で差が出なかった箇所としては、【例 10】【例 11】、【例 12】～【例 15】、【例 17】【例 18】が挙げられる。【例 17】【例 18】の「アリー」や「アボルファズル」のようなイスラーム教のシンボルは、イスラーム文化圏外では認知度が低く、メディア特有の制約からも TT には反映されにくいといえる。この事例は、Pedersen（2005）の観点から背景を説明できるが、一方で、【例 10】【例 11】や【例 12】～【例 15】はペダーセンの観点では説明できない。【例 12】から【例 15】に出てくる「イマーム・ホセイン」と「イマーム・ザマーン」に対する翻訳として、英語版では “martyrs” という言葉が、日本語版では「殉教者」が充てられている。日本語版の翻訳には、英語字幕の影響が見て取れる。この事例から、英語字幕の影響は日本語版の訳出方略（どう訳すか）のみならず、数ある選択肢からどの言葉を選ぶか（語彙レベルで何と訳すか）にまで及んでいることがわかる。「翻訳は、単に言葉を訳すだけの行為ではなく、また文化の差を埋めるだけの行為でもない」（Pérez González 2009）と言われるように、TT そのものが、TT 社会でイラン的価値観や文化に付与するイメージの重大性を無視することはできない。果たしてその結末を多少なりとも英語の介入に任せてよいのだろうか。日本におけるイラン映画の翻訳に関しては、これらの観点を十分に検討することが必要だ。

ここで、「固定化された引喩」以外の箇所でも、英語の影響が日本語版に表れている例が見つかった。以下の例の ST は、いずれもイラン的な異文化要素を含んでいる。

【例 19】

ST	日本語訳
ترمه بابا این مانتو و مقنعه مدرستو وردار بیار من بریزم تو ماشین	テルメーちゃん、この学校のマントとスカーフをもってきて、私が洗濯機の中に入れる

TT-E:　Termeh, get your laundry.

TT-J1:　テルメー 洗濯物を

TT-J2:　テルメー ちょっと洗濯物を持ってきてくれ

【例 19】は、ナデルが学校帰りの娘の制服を洗濯しようとする場面である。ここでは、イランの文化的要素（学校の女子生徒の制服がマントとスカーフであること）が完全に削ぎ落とされている。この発言の後、ナデルは洗濯機の使い方がわからず焦るのだが、ST 受容者は、ナデルが家事や娘のことを妻に任せきりにしていたことが窺い知れる。しかし、TT 受

容者はどうだろうか。着用した制服を脱いで洗うという、学校に通う子どもがいる家庭ではありふれた風景にも関わらず、それがナデルにはできていないという文脈が、“laundry” や「洗濯物」という訳からは受容者に伝わらない。「共働きでただ家事ができない（洗濯機の使い方がわからない）父親」なのではなく、「娘（の制服）の面倒も見ていなかった父親」が描かれているのである。

【例 20】

ST	日本語訳
من این شجریان رو ببرم	私はこのシャズリーアンを持っていく

TT-E:　I'm taking this CD.
TT-J1:　持ってくわ
TT-J2:　この CD 持ってくわ

【例 20】は、夫ナデルと別居するために、妻シミンが自宅を去る場面である。その際、シャズリーアンの CD を 1 枚手に取る。モハンマド・レザー・シャズリーアンは、イランで最も偉大な伝統的ペルシア音楽の巨匠といわれる（Davison 2020）。シャズリーアンの音楽を愛聴していることから、シミンはイランの中流階級の家庭で一定レベルの教育を受けたと思われる。しかし、この時シミンがどのような気持ちでシャズリーアンの音楽を選んだのか、イランの文化に馴染みのない TT 受容者にわかる術はない。実際問題として、同化的手法が選ばれるのが致し方ない場面ではあるが、日本語字幕が省略しているのに対して、日本語吹き替えでは、英語字幕と同じように「CD」という訳が選ばれている。英語の影響が出ている例である。

【例 21】

ST	日本語訳
ببخشید من یه سوال داشتم	すみません、私は質問がある

TT-E:　I have a religious question.
TT-J1:　宗教上の質問があります
TT-J2:　宗教上の質問があるのですが

【例 21】は、ST にはない言葉が TT で追加された例である。イスラームの教えに敬虔なラジエーが、ナデルの年老いた父親を介助しても罪にならないかを確認するため、聖職者に電話で質問する場面である。『別離』公式パンフレットでは、「ナデルの父が失禁したことに気づいたラジエーが電話で相談した相手は、イスラム教の聖職者」と説明がある（「映画『別離』を理解するためのワンポイント」：15）。イスラーム社会では、家族以外の異性の肌に触れることは禁じられている。この社会的背景を知らなければ、ST の情報だけではラジエーが誰に何の質問しているのか見当がつかず、なぜ介助することに抵抗があるのか誤解を与える恐れがある。英語字幕では “religious question” と、日本語版では「宗教上の質問」と補足的に訳されたことで、ラジエーが少なくとも宗教上の問題から介助に戸惑っている様

子が受容者にわかるように工夫されている。この例からも、日本語版の翻訳に英語からの影響が見て取れる。

以上の事例を踏まえると、ペルシア語から日本語の翻訳については、ペダーセンの 7 つの要素では説明できないものがあり、『別離』のテクストの日本語翻訳において英語の影響があることが示唆される。イラン映画の翻訳を考える上で、英語の影響を考慮する必要がある。では、テクストの選択段階ではグローバル化の影響は見られないだろうか。

イラン映画が日本で受容されるに至るには、映画配給会社による作品選別、メディアの選択、宣伝の仕方の決定、翻訳者による訳出方略の選定など、さまざまな過程と手順を経ている。イラン映画が日本で劇場公開されるには、その作品が主要な国際映画祭やアカデミー賞といった国際的な場で注目を浴びることがきっかけとなる。「イラン映画の存続は、国際マーケットなしには成され得なかった」（Tapper 2002: 9）と指摘されるように、イラン映画は世界の主要映画祭で高い評価を受け、その恩恵を受けてきた。Dabashi（2001）によると、イラン映画に対するグローバル化の影響は、1997 年にアッバース・キアロスタミ監督がカンヌ映画祭でパルムドールを受賞した時から本格的に始まった。イラン映画がワールド・シネマの仲間入りをしたのだ。Dabashi（2001: 9）は、国際舞台でイラン映画に徐々に関心が寄せられていったことのメリットとデメリットの両側面を論じているが、グローバル化を背景として、国際映画祭や映画配給システムがイランの映画産業に及ぼす影響には懸念を示す。ヨーロッパや北米で注目を集めた作品が日本で公開されるという流れは、ダバシの指摘するイラン映画へのグローバル化の影響のひとつと捉えることができる。

ヨーロッパや北米で注目を集めた作品が日本で公開されるという流れを汲んでいるのは『別離』に限ってのことではない。実際、『別離』が製作された 2011 年を基準に、2007 年から 2015 年までの 9 年間に日本で公開されたイラン映画 10 作品のうち、9 作品[10]が欧米の主要映画祭で何らかの賞を受賞し、その情報が予告編や DVD パッケージに、受容者が気付くような方法で宣伝文句として使用されている。このような情報は、日本の潜在的鑑賞者を惹きつけるための常套手段となっていることがわかる。つまり、イラン映画の日本語版 TT を、日本の鑑賞者に観たいと思わせる動機付けが、ST の送り手ではなく TT の送り手（日本の配給会社）によって新たに作り出されているのだ。このように日本で一般公開されるイラン映画のほとんどが、欧米の視点から評価された作品であることを鑑みれば、イラン映画の選考には一種のフィルターがかかっており、ここにグローバリゼーションの影響が見られるのではないかと考える。すなわち、テクストそのものの翻訳だけでなく、作品選考の時点から欧米の視点が入り込む余地があるのだ。

イラン映画が日本で初めて配給された 1993 年[11]から 2021 年までに、日本で公開されたイラン映画作品は 65 本にのぼる[12]。テレビ放映や DVD 視聴やオンライン視聴を含めると、さらに多くの作品が鑑賞者のもとに届いてきたと予測される。イラン映画の翻訳を語る上で欠かせないのが、ショーレ・ゴルパリアンの存在である。ゴルパリアンは、35 年以上にわたって様々な方面で日本とイラン映画を結ぶ活動に従事してきた（中山 2018）。イラン映画作品を日本に紹介する重大な役割を担ってきたゴルパリアンに、2015 年 12 月 1 日、東京でインタビューを実施した。そこで、ゴルパリアンは日本で公開されたイラン映画作品のほぼ全て[13]において、字幕翻訳者あるいは字幕監修者として翻訳制作に携わってきたこと

が明らかになった。インタビューによるとゴルパリアンは英語の台本を見ない。日本人字幕翻訳者と密に連携を取り合い、翻訳の過程でイランの文化的・歴史的・宗教的背景をこと細かに説明することも多々あるという（大庭 2017)。しかし、映画翻訳の慣例として、英語の台本が翻訳者に配られ、それを基に字幕（や吹き替え）が制作されることがある（藤濤 2007、ピム 2010、Pérez González 2009）。ペルシア語のわからない日本人字幕翻訳者や日本人吹き替え翻訳者が、英語字幕や英語の台本を参照する可能性は十分にあり、イラン映画の日本語翻訳プロセスにおいて英語を介した重訳の影響は排除できない。

ゴルパリアンを除いて、イラン映画の翻訳への関与者の大部分は、英語テクストに頼っていると思われる。この状況を踏まえると、イラン映画の翻訳を特定の人物に頼っている事態は危ういと言える。翻訳のあり方が多様化する今日、翻訳研究においても重訳に対する悲観的な捉え方は見直されつつある。しかし、ゴルパリアンは英語の介入には否定的な立場を示す。『別離』の日本語字幕翻訳では、英語から影響を受けていない独自の訳出方法が、数は少ないものの確かに確認された。これは、ゴルパリアンの英語の優位性に屈しない姿勢の賜物なのである。

V　おわりに

異文化間リテラシーが重要視される今日、文化的背景の異なる人々やその社会と互恵的に交流することが求められる。そのような国際化社会において、文化と文化をつなぐ翻訳の果たす役割は大きい。国際言語である英語やグローバル化の影響は、日本社会において、イラン映画の翻訳という一見無関係に見える領域でさえも必然の事象である。翻訳者も受容者も、英語の介入とその影響が身近に迫ることを自覚していれば、映画をはじめとする文化を映し出す装置を通して、異なる言語や文化を背景に持つ人々のことをより深く理解できるかもしれない。本研究を通してその重要性を強調したい。ひと口に英語の影響と言ってもその及ぼす範囲ははかり知れないが、本研究ではイラン映画の翻訳への視座を通じて、英語の介入にまつわるテクスト内外の問題に焦点を当てた。

本稿で明らかになったのは、次の 2 点である。1 つ目は、『別離』におけるイランの文化的要素の日本語訳については、背景に媒介語としての英語の影響がはっきりと見て取れることである。テクスト全体に関わる翻訳ストラテジーおよび個別の訳出方略の選択のいずれも、日本語版は英語版から影響を受けるということが実証された。したがって、イラン映画の翻訳については「ECR の訳出方略の決定に影響を与える 7 つの要素」(Pedersen 2005) に、英語の影響を付け加えることを提案する。もう 1 つは、イラン映画が日本に受容される過程においては欧米の視点が入り込み、一種のフィルターがかかっていることである。ゴルパリアンの姿勢によって、イランの観点を直接翻訳に反映させることが現在はできているが、イラン映画の日本への受容と翻訳のさまざまなプロセスをゴルパリアンが一手に担っている状況は危ういのではないだろうか。

今回の研究では、テクストの分析とテクスト外の問題点の検討を別々に行ったが、今後はイランの文化的観点も踏まえた上で、総合的に研究を発展させることが求められる。また、今回テクストの分析において採用した訳出方略の分類は、元は英語字幕を分析するための

分類であり、それが吹き替えにもそのまま当てはめられるのか再検討する必要がある。最後に、今回は「固定化された引喩」の一分野に注目して研究を行ったが、その他の異文化要素（例えば、コーランや神や聖人などの固有名詞が出てくる他の箇所や呼称など）についても、対象を広げると新たな発見があるだろう。今後の課題としたい。

（神戸大学国際文化学研究科博士後期課程）

注

[1] 本論の分析対象は映画であるが、映画はストーリーそのものやその翻訳を通して、異文化接触の機会を視聴者に提供する。映画の視聴者は、作品で描かれる社会や文化を、翻訳を介して受容すると捉えることができる。したがって本論では、視聴覚翻訳作品の視聴者のことを受容者と呼ぶ。

[2] Pedersen（2011）は、テレビ字幕における ECR を扱い、ECR を 12 通り（度量衡、固有名詞、職業上の役職名、料理及び酒類、文学、政府、娯楽、教育、スポーツ、通貨、技工物、その他[2]）に分類した。

[3] 篠原（2013）は ECR の訳出方略として、この 6 項目のほかに「公的等価」を加えている。本論の分析作品では「公的等価」の訳出は見られないため、ここでは省くこととする。

[4] Kenevisi et al.（2013）は、これらに加えて حاج آقا「hajāqā（裁判官）」も SA に含んでいる。しかし、حاج آقا は SA というより役職名であり、作中では登場人物の呼称として使われているため、本稿の分析対象からは除外する。

[5] ファルハディは、本作が「イラン国内だけに受ける映画になると思っていた」（『別離』公式パンフレット「監督インタビュー」：9）と語るが、原題に英語タイトルが付されたということは、国際映画祭への出品を通して作品を海外輸出することを最初から視野に入れていたことが窺える。

[6] 日本語版 DVD には「字幕：柴田香代子、字幕監修：ショーレ・ゴルパリアン、吹替：税田春介、吹替演出：宇出喜美」と明記されている一方、英語版には、翻訳者に関する情報は記載されていない。英語圏では伝統的に、翻訳は見えない方が良いとされ、『別離』の英語版 DVD のパラテクストにおいてもその傾向が見て取れる。

[7] (1)「超文化性」とは、ある ECR が起点文化と目標文化の受容者にどの程度知られているかであり、これには「超文化的 ECR」、「単一文化的 ECR」、「狭小文化的 ECR」の 3 つのレベルがある。(2)「外テクスト性」とは、ある ECR が ST の外に存在するかどうかである。(3)「言及の中心性」とは、ある ECR が作品全体（マクロレベル）に関わるかどうか、あるいは局所的台詞（ミクロレベル）でいかに中心的であるか、ということである。(4)「記号間の冗長性」とは、複数の意味チャネルによって情報が重複して伝えられるということである。映画やテレビ番組といった多種記号のテクストでは、言語聴覚（台詞）、非言語聴覚（音楽や音響効果）、言語視覚（看板や字幕）、非言語視覚（画像）という 4 つのチャネルが複合的に使用され、意味情報が重複することがよくある。(5)「テクスト内の前後関係」とは、テクスト内の前後の文脈のことである。同じ情報が繰り返される場合、字幕翻訳者はその都度説明を加える必要はない。(6)「メディア特有の制約」とは、字幕・吹き替えというメディアに由来する固有の制約のことである。(7)「パラテクスト」とは、その国の字幕規範、字幕制作会社や配給会社の指針、映画のジャンル、映画の送り出し手（映画祭か、DVD か、テレビ放送か、映画館上映か）、翻訳の契約条件など、テクストを取り巻く様々な要因のことである。これら 7 つの要素は別々の項目として挙げられているが、相互に深く関連し影響し合っている。

[8] ST の横に添えた日本語訳は、筆者による逐語訳である。

[9] 【例 9】の（　）内の 3 つの方略は به خدا「神に誓って」の訳出方略。

[10] 残りの 1 本はアボルファズル・ジャリリ監督の『イラン式料理本』（2010）である。このイランのドキュメンタリー映画が、2012 年に日本公開されたことは興味深い事例である。

[11] 1993 年 10 月 23 日、アッバース・キアロスタミ監督の『友だちのうちはどこ？』（1992）

が日本で初めて配給された（『キネマ旬報』2013 年 9 月上旬号: 42）。

[12] 外国映画輸入配給協会「外画概況」より。

[13] イラン映画のテレビ放映については、ゴルパリアンが関与しない事例もある。『運動靴と赤い金魚』がテレビ放送のために翻訳された際、日本人字幕翻訳者が英語のシナリオを介して日本語字幕を作成した（篠原 2018: 116-119）。

参照文献

Dabashi, H. (2001). *Close Up: Iranian Cinema, Past, Present and Future*, London & New York: Verso Books.

Davison, P. (2020). "Mohammad Reza Shajarian, Classical Singer Revered in Iran, Dies at 80". *The Washington Post*. 12 October 2020. [online] https://www.washingtonpost.com/local/obituaries/mohammad-reza-shajarian-classical-singer-revered-in-iran-dies-at-80/2020/10/11/c1713d6c-0a45-11eb-9be6-cf25fb429f1a_story.html
（2023 年 2 月 1 日 12:00）

Díaz Cintas, J. (1999). Dubbing or Subtitling: The Eternal Dilemma, *Perspectives: Studies in Translatology*, 7(1), 31-40.

Gottlieb, H. (1997). Quality Revisited: The Rendering of English Idioms in Danish Television Subtitles vs. Printed Translations. In Trosborg, A. (Ed.), *Text Typology and Translation*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 309-338.

____ (2009). Subtitling against the Current: Danish Concepts, English Minds. In J. Díaz-Cintas (Ed.), *New trends in audiovisual translation*. Bristol: Multilingual Matters, 21-43.

Hatim, B. & Mason, I. (1997). *Translator as Communicator*. London/New York: Routledge.

Kenevisi, M. S., Sharifabad, E. D. and Bojnourdi, S. A. S. (2013). A Comparative Analysis of the Translation of Stereotyped Allusions in English Subtitles of "*A Separation*", In *The Iranian EFL Journal*, 9(6), 230-241. [online] https://www.researchgate.net/publication/259870632_A_Comparative_Analysis_of_the_Translation_of_Stereotyped_Allusions_in_English_Subtitles_of_A_Separation
（2022 年 10 月 26 日 12:00）

Leppihalme, R. (1997). *Culture Bumps: An Empirical Approach to the Translation of Allusions*. Clevedon/Philadelphia/Toronto/Sydney/Johannesburg: Multilingual Matters.

____ (2011). Realia. In Gambier, Y. & van Dooeslaer, L. (Eds.), *Handbook of translation studies vol. 2*. Amsterdam: John Benjamins, 126-130.

Pedersen, J. (2005). How is Culture Rendered in Subtitles? EU-High-Level Scientific Conference Series. In *The Challenges of Multidimentional Translation*: Conference Proceedings, 1-18.

____ (2011) *Subtitling Norms for Television. An exploration focusing on Extralinguistic*

Cultural References. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Pérez González, L. (2009). Audiovisual Translation. In Baker, M. & Saldanha, G. (Eds.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* (2nd ed.). London & New York: Routledge, 13-20

Ramière, N. (2006). Reaching a Foreign Audience: Cultural Transfers in Audiovisual Translation. In *The Journal of Specialised Translation* 6: 152-166.

St André, J. (2009). Relay. In Baker, M. & Saldanha, G. (Eds.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* (2nd ed.). London & New York: Routledge, 230-232

Tapper, R. (2002). Introduction. In R. Tapper (Ed.), *The New Iranian Cinema: Politics, Representation, and Identity*. London & New York: I.B.Tauris, 1-25

大庭夕穂（2017）「日本におけるイラン映画の受容と翻訳についての研究 —『運動靴と赤い金魚を中心としたパラテクスト分析』」『国際文化学』No. 30. 2017, 1-21

篠原有子（2013）「映画『おくりびと』の英語字幕における異文化要素（日本的有標性）の翻訳方略に関する考察」『翻訳研究への招待』No. 9, 2013, 81-97.

____（2014）「日本映画の英語字幕における訳出要因について —制作プロセスと視聴者に着目して—」『通訳翻訳研究』No. 14, 2014, 97-114.

____（2018）『映画字幕の翻訳学 —日本映画と映画字幕—』京都: 晃洋書房.

清水（1990）『字幕は翻訳ではない』東京: 早川書房.

中山治美（2018）シネマトゥディ「35 年に渡りイランと日本映画を結んだ女性プロデューサーの貢献！」.[online]
https://www.cinematoday.jp/news/N0104902
（2022 年 11 月 1 日）

浜田奈美（2012）朝日新聞「分かり合えない切なさ　『別離』ファルハディ監督」. [online]
http://www.asahi.com/showbiz/movie/TKY201204070205.html
（2022 年 10 月 30 日）

ピム, アンソニー（2010）『翻訳理論の探求』武田珂代子訳, 東京: みすず書房.

ファルハディ, アスガー（2012）「アスガー・ファルハディ監督インタビュー」藤樫秀剛編集協力『別離パンフレット』東京: マジックアワー, 9-10

藤濤文子（2007）『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相』京都: 松籟社.

____（2013）「訳者解説」ベイカー, モナ. サルダーニャ, ガブリエラ編 『翻訳研究のキーワード』藤濤文子監修・編訳, 東京: 研究社, 225-255.

____（2016）「『モード間翻訳』による非言語機能の変更について —3 段階分析の枠組みを用いて—」. 『翻訳研究への招待』No. 15, 2015, 19-32

米光一成（2012）excite【エキレビ!】「介護、離婚、殺人罪。90 以上の映画賞獲得の傑作『別離』を見逃すな」. [online]
http://www.excite.co.jp/News/reviewmov/20120409/E1333907913394.html

（2022 年 10 月 30 日）

参考サイト

外国映画輸入配給協会：「外画概況」
https://www.gaihai.jp/filmlist.html
（2022 年 10 月 31 日）

参考パンフレット

藤樫秀剛編（2012）『別離』マジックアワー.

分析テクスト

Farhadi, Asgar (2012) “A Separation” U.S.A. DVD, SONY PICTURES CLASSICS.
ファルハディ, アスガー（2012）『別離』日本版 DVD, 株式会社ハピネット